

## <エッセイ>故白倉敬彦さんへ

著者	早川 聞多
雑誌名	日文研
巻	54
ページ	15-18
発行年	2015-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00004044">http://doi.org/10.15055/00004044</a>

## 故白倉敬彦さんへ

早川 聞多

去年の十月四日、珍しく帰宅がおそくなり暗い玄関に入ると、女房が重い足どりで迎へに出て来た。そして「白倉さんが亡くなつた。夕方奥さんから電話があつた」と言つた。「ああ」と応へて女房の顔を見ると眼が赤い。夏の末ころの電話で、いつもの声色ながら「食ひ物の匂ひが鼻について口に入らないんだ」といつてをられたので、私はああこれは覚悟してをられるなど感じてゐた。私の最初の癌の手術の後、為事がてらに嵯峨の自宅に來られた白倉さんが、よく一緒に行つてゐた嵐山の鰻屋で、いつも少食の白倉さんの分まで食べる私を見て、「それなら大丈夫だよ」と嬉しさうに笑はれてゐたのを思ひ出したからである。女房から「主人の意志で家族だけで送ります」といふ奥様の伝言を聞いて、「白倉さんらしいな」と思ひつつ、机の前に座り東に向かつてただ瞑目するだけであつた。

白倉さんは日文研における春画艶本の蒐集を、最初から一貫して強く支持され、最後に入院された去年の春まで、実に二十五年間、その資料の調査と選定の相談に常に惜しみないアドバイスをしてくださった。その相談は京都と埼玉の間なので、いつもどちらからか電話して長い話となつた。女房がいふには、「家の電話はまるで白倉さんとの専用回線ね」といふやうな状態で、夜に電話が鳴ると「あ、白倉さんでは」といふほどであつた。

白倉さんと知り合つたのは私が日文研に入つた昭和六十二年以前、大和文華館の学藝員時代

に『蕪村画譜』といふ本を書いた時のことで、三十数年前のことであつた。その頃白倉さんは独立の編集者で、その本の編集担当であつた。春画を介して白倉さんと頻りに連絡をとるやうになつたのは、日教研に入つてすぐ、G社から原寸無修正の『浮世絵秘蔵名品集』全四巻を出すことになつた時からであつた。その時白倉さんは全作品の資料蒐集と厳密な色校正を担当され、それまでにない浮世絵春画の豪華で精緻な複製集を完成された。

その何度目かの編集会議の場で、当時学習院大学のK・T先生が、「これからは正面から春画の研究をする必要があると思ふが、現物の作品にあたることは今の日本ではたいへん難しい。どこか公の機関で蒐集して、誰でも実見して研究できるやうにしなければならぬ」とおつしやつた。その場にをられた東大のT先生、名古屋大のK・M先生、千葉市美のAさんも大きく頷かれたが、「大学や美術館で春画をコレクションするのはまだまだ難しいなあ」といふ話にやつた。そこで若気の至りといふか、「日教研の資料蒐集の一つの柱として提案してみます」と思はず私が申し出たのであるが、それに即座に破顔をもつて応じられたのが白倉さんであつた。家の電話が白倉さんとの専用回線のやうになつたのはそれからのことである。

その頃の日本では、春画艶本は公には強くタブー視されてをり、売立目録のみならず所蔵目録にも公表されることはなかつた時代であつたので、さあ春画艶本を蒐集するといつても、まづはその方面に目の利く信頼のできる古書・古美術商の手助けがなければ、安定した堅実な蒐集は不可能であつた。その最初の難関を開いてくださったのが、先の『浮世絵秘蔵名品集』のために資料収集をされてゐた白倉さんであつた。

さていよいよ春画艶本の蒐集を開始するにあたつて、白倉さんと相談して決めた原則は、  
一、浮世絵史の各時期にわたつてバランスのとれたものであること。

- 一、数ある後摺改題本や摸倣本は避け、様ざまな趣向の劃期的な資料であること。
- 一、日文研に展示場がないことを考慮して、版画版本を主として高価な肉筆の春画は対象外とする。
- 一、蒐集資料はできるだけ早くデジタル化し、順次データベース化してインターネットで公開すること。

かうした意向を誠実に酌み取り、東京のみならず日本各地の売立て市にも目を配り、時には優品の出る欧米のオークションにまで足を運んで春画艷本を取り扱っていたのが、東京の古美術商のS氏である。S氏と白倉さんの間には商売を超えた深い信頼関係があり、またお二人とも公の機関で古美術品、それも春画を蒐集する際のいろいろな難しさをよく理解されてをられた。S氏がこれとは思ふ資料を見出されると、まづ白倉さんに連絡され、白倉さんが実見されて判断がつかないと、先のT先生やK・M先生、Aさんと共に検討される。そしてその都度、白倉さんから電話があり、長い電話となるのであつた。そして私は年に二度、東京に出て白倉さんと現物を見ながら最終判断をし、「近世風俗資料」として購入希望リストに優先順位をつけて、毎年研究資料委員会に申請を出すといふことを二十数年続けてきたのであつた。

一昨年秋に大英博物館で開催された日英交流四百年記念の大春画展に、日文研から相当数の作品を提供できた時には、白倉さんと長いやうで短かつたこの二十数年の春画蒐集を思ひながら、お互ひに電話口で感無量であつたことを思ひ出す。

白倉さんは早くから日本で春画展を開くことを主張してをられ、大英博の春画展が日本の美術館博物館で受け入れられなかったことを歎いてをられた。去年春四月、白倉さん最後の本『春画と人びと——描いた人・観た人・広めた人』の後書きに、病床にあつた白倉さんは次の

やうに記してをられる。

春画にとって大切なことは、春画を特別視しないことだ。春画は人間の自然な営みの一つ、性行為を描いたものだ。性行為は別に特別なものではないし、成人男女にとっては自然な営みの一つである。それをタブー視するから、猥褻に見えるのである。とくに日本では、猥褻かどうかの基準の一つに、生殖器が見えるかどうかが問題となる。あたかも、人間誰しもが保持している生殖器が猥褻物であるかのようなようだ。これには、西欧人も大笑い。判りやすい基準ではあるが、あまりにも幼稚で愚劣で馬鹿々々しいと散々である。

そして十二年前、白倉さんと一緒に企画から参加したヘルシンキ市美術館での春画展を回想しながら、

(会場では) 幼い子らがはしゃぎ廻っていた。そこにあるのは、明るい笑いだけだ。かつての江戸も同じような感覚であったはずだ。どうして、いつから、それができなくなったのだろうか？不思議といわざるを得ない。

これが白倉さんの最後の文である。私は最後の電話で、今年の秋に東京で開催されることになった春画展のことを、その時話したであらうか。後で思ふと、あの時の白倉さんの声が肉耳にありありと残つてゐるだけで、まったく覚えてゐない。何とも残念である。

(国際日本文化研究センター教授)